

P4 上下左右乳臼歯部に低位乳歯を認めた遠位中間肢異形成症疑い患児の1症例

Multiple submerged deciduous teeth in the patient with suspicious acromesomelic dysplasia.

○山田亜矢¹⁾, 中村由紀²⁾, 岩本 勉²⁾, 福本 敏¹⁾, 野中和明²⁾

Aya Yamada¹⁾, Yuki Nakamura²⁾, Tsutomu Iwamoto²⁾, Satoshi Fukumoto¹⁾

Kazuaki Nonaka²⁾

東北大学大学院歯学研究科 口腔保健発育学講座 小児発達歯科学分野¹⁾

九州大学大学院歯学研究院 口腔保健推進学講座 小児口腔医学分野²⁾

Division of Pediatric Dentistry, Department of Oral Health and Development Sciences, Tohoku University Graduate School of Dentistry¹⁾

Section of Pediatric Dentistry, Division of Oral Health, Growth and Development, Faculty of Dental Science, Graduate School of Dental Science, Kyushu University²⁾

【緒言】

低位乳歯とは、咬合平面より低位にあり、隣接歯の萌出や歯槽骨の成長、歯槽堤の増高のため歯肉内に沈下したように見える状態の乳歯のことである。原因として、乳歯根の骨性癒着、後継永久歯の欠如、隣接永久歯の萌出による圧迫、外傷や感染による歯槽骨の発育不全などが考えられている。今回、遠位中間肢異形成症が疑われる患児の上下左右乳臼歯部に重度の低位乳歯が認められた症例について報告する。

【症例】

8歳1か月時に、九州大学病院矯正歯科より萌出中の下顎両側第一大臼歯咬合面に存在する骨様物の精査目的で同病院小児歯科に紹介された女児。この時点で上顎両側第一乳臼歯は完全埋伏、下顎右側第一乳臼歯は半埋伏、下顎左側第一乳臼歯は低位乳歯であった。その2年8か月後の再来院時、上下左右乳臼歯部がさらに低位となり、完全埋伏している部位からの排膿が認められた。患児は軟骨形成異常のため、低身長、手指および足指の短縮を伴い、同病院整形外科にて遠位中間肢異形成症疑いにて管理を受けている。

【考察】

遠位中間肢異形成症は軟骨の形成に異常があり、手指の先、足の先に向けて短くなる傾向がある常染色体劣性遺伝の四肢短縮型小人症である。本患児に関しては、現時点で同疾患の確定診断は得られていないが、軟骨形成異常が認められる事は明らかである。軟骨形成異常の認められる患児において、注意深い定期的な歯科的管理が必要とされる事が示唆された。